

# 日本における外国語としての英語教授法

佐 藤 保

Teaching English as a Foreign Language in Japan

Tamotsu SATO

## Abstract

We Japanese are confronted with international problems, whether we hope to or not. I have pursued the principles of learning and teaching English for about twenty years at Junior High School, Senior High School, Institute of Foreign Language, and College. In this paper, I insist that we should study the principles of English teaching from the point of comparing the English language with the Japanese one. In other words, I deal with these principles in the side of comparative culture.

## 1. は じ め に

この論文を書くにあたって留意したことは中学生から大学生・社会人一般までを貫く形で英語教授法の原則を追求したかったということ、およびそのために文字どおり原則論の提示になり具体的提案は本論文においては第5章の3項目にとどめたということである。今日、英語教育学は学問として認知されつつあるといえよう。しかしそのかかえる問題点はあまりにも大きすぎる。ちなみに千葉大学教授、竹蓋幸生氏はその著「日本人英語の科学」(研究社出版)の中で次のような表によってこの学問の必修分野を提案されている。

外国語学習, 教育

二重言語性  
比較言語学  
比較音声学  
比較文化  
外国語教育研究計画論  
外国語学習理論  
英語教育カリキュラム論  
英語教育教材論(含学校文法)  
英語教育方法論  
英語教育史  
日本人の英語(実態調査)

誤り分析  
辞書論  
言語教育評価  
教育実習  
その他

つまり総合科学なのである。筆者としては英語教授法がすべてなどとはさらさら考えていないが、今日、新しい国際化の波に洗われつつある日本、および日本の学校教育(特に大学教育)においては好き、嫌いにかかわらず絶対に避けて通ることの出来ない主題と考えている。筆者自身はこれの中で比較文化および教材論に興味と関心を持っており、本論文では前者を扱ってみた。また、別の機会に後者を英米児童文学論として論じてみたいと思っている。

## 2. 日本における戦前の英語教育

### ——イギリスの教授法——

1922年, Harold E. Palmer が文部省語学教育顧問として, 来日, 翌1923年, 英語教授研究所(現在の語学教育研究所)を創立, 初代所長となった。以来1936年帰国するまで, 在日14年間, すぐれた識見・豊富な経験・不屈の意志・旺盛な実行力をもって, 著述・講演・教科書編集・放送などを通じ, わが国の英語教授法改善のために精力的な活動をつづけた。Palmerの研究と実践は英語教授法のあらゆる領域にわたってい

るが、その著、「The Principles of Language Study」(1921)<sup>#1</sup> その他において、自分は「あらゆる意見を取入れる。無益・有害なもの以外はいかなるものも排撃しない。——目的へ到達するためにもっとも良い、もっとも適切な手段を取入れる——自分は折衷主義 (electic principle; electism) の立場に立つ。」旨を率直に表明した。

1934年、2月、Palmerは、英語教授研究所発行の「Bulletin」(No. 101)に、「公理10条」(Ten Axioms)なるものを発表した。これは彼が外国語教授法の出発の基盤となると考えた要項を10カ条にまとめたもので、彼の多年の研究成果をもっとも簡潔明快に整理・集約したものであり、彼の言語教育観のエキスとも考えられる。その中で今日、われわれが注目すべきものに次の公理2が挙げられる。

Axiom II. That a language may be looked upon and treated both as a “code” — the organized system of the language as exemplified by its dictionary, its grammar, and all the information and rules that can be given concerning it, and as “speech” — the sum of the activities involved in the using of the language.

これは言語を la language (体系としての言語) と la parole (運用としての言語) とに区別する F. de Saussure の理論に基づく解釈である。われわれは何事かを相手に伝えようとするとき、その社会的集団の習慣に従って行っている。つまりその社会的集団が共有している言語材料を使って伝達を行う。この習慣的にきまっている材料を使わなければ相手の納得は得られない。この社会的集団の共有財産ともいべき言語材料が Language である。またこれを運用する行為が Speech である。

たとえば、Is he a student? という場合、われわれはその単語—その単語の並べ方・発音の仕方はその社会できまった材料から借りたり、その習慣に従って使用する。しかし上の例文でも、個人によって、用いられる時と場合によって、多少とも、声の調子もちがうし、意味がちがって来る場合がしばしばありうる。「彼は学生ですか」という純粋な質問の場合もあろうし、口調によって「彼が学生なんて、まさか」のようにおどろきを表したり、むしろ否定的な意味を含む場合もある。このように Speech という行為は、「瞬間的・現実的・個別的」なものであるのに対し、Language は恒常的・過去の・集団的なものと言える。しかし、この

両者の関係は非常に密接なもので、もともと Speech があって、その集積が Language となったものであろうし、また Speech は Language から材料を借りてこなければ成立しない。Palmer は外国語教授の目標は言語の実際の使用に習熟させること、つまり「運用としての言語」(Speech)の問題であり、従来の言語教授は Language の教授に重点がおかれていたので失敗に終わることが多かったと指摘している。以上のような Palmer の唱導した oral work 重視の教授法をわが国では oral method と呼ばれている。

注1 「The Principles of Language Study」(Harrap, 1921)

### 3. 日本における戦後の英語教育 ——アメリカの教授法——

Charles Carpenter Fries の提唱している oral approach は一連の指導技術から成る単なる教授法ではなく、もっと幅広いものであり、その中には当然現代の言語学の基礎となっている正しい言語観とそれに基づく教材ならびに教授法が含まれるのである。従って、まず oral approach の背景をなす言語観に触れ、その後、教材および教授法について述べることにする。

Oral approach は Fries の提唱する言語の指導法であるけれども、なぜこれを oral approach と名付けたかについて、彼は次のように述べている。

「oral approach の oral の部分はこの指導法の目標を示している。それは学習者が自動的に英語を口頭 (oral) で発表できるようになることである。また approach とは、その目標に到達するのに必要なあらゆるものを含む道筋という意味である。」<sup>#1</sup>

つまり oral approach とは口頭による指導法という意味でもなく、従って最初から reading や writing を除外するという意味でもない。まずその目標を明らかにしておいて、その目標を達成するためには、あらゆる有効手段を用いるという意味である。このような方法の基礎・土台にあるのは次のような言語観である。

現在のいわゆる構造言語学は1925年に発表された Edward Sapir の「Sound Patterns in Language」という論文に始まるといわれているが、この時代に発見されて言語学の基礎理論となったのは Fries によれば<sup>#2</sup>

(1) 言語は構造体である。この構造的特徴の故に、言

語ではきわて複雑な伝達も可能になる。

- (2) 言語の本質は音声である。しかしながら、客観的に見て同じ発音であっても、異なった言語を話す人々には異なって理解され、反応されるものである。換言すれば、同じ音声学的な差異でも言語によっては全く異なった構造上の価値をもつのである。
- (3) 一般的にいて、言語の発音は、それ自体でやさしいとか、むずかしいとかいうものではない。聴き分けや発音がやさしいか、むずかしいかは、その音が自国語の型と同じであるかどうかにかかっている。
- (4) 言語の語の型や文型を区別する言語単位は対立的な特徴をもっている。言語が対立から成立しているということは、構造言語学の根本理論である。

次に oral approach の教材および教授法について概観してみると、まず 1957 年に Fries が ELEC（財団法人英語教育協議会）の要請に応じて執筆した教材要綱（Corpus）が挙げられねばならない。この研究はその後も続けられ、その成果は 1961 年 3 月夫人との共著「Foundation for English Teaching」として研究社を通じて出版された。この本の中で Fries は次のように述べている。

「理想的な教材とは、いわゆる構造中心のもので、英語の構造がそれぞれ互いに密接な連関関係にある、まとまった体系として提示され、学習されるものであって、しかもこれらの英語の構造は連続する対立の小さな段階（successive small steps of contrast）をなすよう配列され、学習者の学習上の抵抗をできるだけ少なくしなければならない。」この「連続する対立の小さな段階」は、教材の選択・配列に関する最も重要な原則なのである。この同じ原則が英語の学習指導にも適用されるべきは当然であって、一つ一つの学習作業は学習者の側における学習上の抵抗が最小になるよう細心の注意のもとに選択・配列されたものにならないのである。

注 1 C.C. Fries, 「On the Oral Approach」1958, pp. 16

注 2 C.C. Fries, 「Linguistics and Reading」1962, pp. 74-91

## 4. 英語教育の目的と価値

### 4.1 英語教育の新しい視点

第 2 章、第 3 章で概観したイギリスの英語教授法とアメリカのそれとを比べてみると、イギリスの教授法は長い経験を土台にして、実際を重んじ折衷的であり、アメリカのそれは理論を通し、科学的であろうとする。換言すればイギリスの言語学は、アメリカに比べると文学との結びつきが深く、イギリスの教授法が主流であった戦前は、文学作品の鑑賞ということに相当重きがおかれている。

アメリカの言語学は科学と密接な関係があり、かつ言語学を人文学（humanities）と考えるより、社会科学と考え、外国語教育においては伝達を重視する。

従来、わが国では英語の学習は教養のためか実用のためかということが繰返し論議されてきた。しかし、この論争は実りある成果を生んではない。英語は教養のためでもあり、実用のためでもある。外国語の学習によって外国的な思考形式を獲得することが（すなわち思考を深化、拡充することが）教養だとすれば、外国語教育ほど教養を高めるものはない。その点、わが国の英語教育は欧米における外国語教育とはやや趣きを異にする<sup>21</sup>。欧米においては、外国語の多くは自国語と同じ印欧系の言語であり、思想の根源は、ギリシャ・ローマに発した一大思想体系につつまれている。このような状態においては、外国語の学習は役に立つことが目標であり、新しい思考形式や全く異なった文化に接するというのではない。しかるにわが国における英語教育は、言語的には英語と異なったウラル・アルタイ系に属する日本語を母国語とするわれわれが、印欧系の英語を勉強するのであり、かつ英語にもられた異なった思想体系の一部に接するのである。したがってそれは大きな教養の一部である。つまり、recognition と production は常に balance のとれた形で、英語教育に取入れられるべきである。また今日、英語の技術的な面と共に、何を教え、何を学ばせるかということを中心とした communicability ということが外国語学習の最大関心事になり、communicability が学習目的とされるようになってきた。同時にこれに呼応するかのようになり、速読（rapid reading）ということが高校や大学の教養課程で重視され始めた。速読は、簡単に言えば大意をとる読みかたである。この方法は基本的には、ある数の単語の知識は必要だが、一つ一つの単語の意味はわからなくても、いちいち辞書をひか

ないで読み進んで、単語の真の意味は前後関係で理解するという読み方である。単独に孤立している単語でなく、文脈や背景が必要だということである。言語と文化が不可欠なことは昔から言われてきたが、今日、文化研究の重要性をいくら強調しても強調し過ぎることではない。その意味で日本人が思考の中心を母国語(日本語)に持っている以上、日本語の使用を避けてはならない。否、積極的に活用すべきである。(Palmerの主張した“Thinking in English”は長い間、日本人には誤って受けとめられている。)英語教育における発話の問題は、日本語で思考したことをいかに英語で表現するかの訓練である。端的に言えば、「これを英語で何と言うか」という訓練である。英語と日本語の対照研究でもある。

注1 「The similarities and dissimilarities between ESL and EFL」 by Tamotsu Sato

#### 4.2 比較文化の思想

「人間は客観的な世界にだけ住んでいるのでもないし、また、ふつうの意味での社会的活動の世界にのみ住んでいるわけでもない。人間は自分たちの社会にとって表現の手段となっているある特定の言語に多く支配されているのである。基本的に言語を使うことなく現実に適応することが可能であると考えたり、言語を伝達とか反省の特定の問題を解くための偶然の手段にすぎないと思ったりするのは、全くの幻想である。事実、「現実の世界」というものは、多くの程度にまで、その集団の言語習慣の上に無意識的に形づくられているのである。…われわれが聞いたり、見たり、あるいは経験したりするのに大体一定のやり方があるが、これはわれわれ共同体の言語習慣がある種の解釈を前もって選択させるからである。」Edward Sapir<sup>21</sup>

「一般に認められた語の使われ方は、しばしばある種の思考形式や行動様式に先行するという命題がある。この命題には多分広く同意が得られるであろう。(中略) Sapir は言語と文化と心理の間に重要な相互関係を認め冒頭の引用の中でその一つのもつ意義を簡潔に表現してみせているが…(以下略)」 Benjamin Whorf<sup>22</sup>

これがいわゆる「サピア・ウォーフの仮説」(the Sapire-Whorf Hypothesis)として、多分、1950年代の前半から文化人類学や言語学の世界を中心に使い始められた二人の主張である。非常に大まかにひとりで言表わすならば、「言語と人間の経験の様式の間には関

係がある」ということであろう。平野敬一氏が「マザー・グースの唄」(中央公論社)の序文で「イギリスの伝承童謡に親しむことにより、英語国民の生活感覚や言語感覚の機微というか波長というか、そういうものがたんなる観念としてでなく、実感としてわかってくるようになる、という効用もあるのである。外国人の英語学習に避けがたい、わかりかたの幾分かは、これによって矯正されるものと私は信じている。こういういわば基盤からの親炙と理解を欠いては、高遠な文化論も颯爽たる文学論も、砂の上にむなしく築かれた論議になりかねないように思われる。」と述べているのもまさに言語と文化が切っても切れない関係にあることを強調して止まないものであろう<sup>23</sup>。しかしながら、英語を共通言語として捉える思想は、もう一つの観点を必然的に引出してくる。それは比較文化の視点である。比較文化の思想とは、文化を単純に文明 VS 野蛮という構図で切取るのではなく、それぞれの文化にはそれぞれのシステムや価値観があるということを認めることなのである。

注1, 注2 「文化人類学と言語学」池上嘉彦訳 IV. 習慣的な思考および行動と言語との関係 pp. 9-10 弘文堂

注3 「The similarities and dissimilarities between ESL and EFL」 by Tamotsu Sato に筆者の Mother Goose についての考えが簡単ではあるが述べてある。

#### 5. 具体的提案

##### ——日英口語表現の比較文化的分析——

<1> Parting (さようなら)

Good-bye.

Good night. (夜寝る前だけでなく、別れる時にも使ういさつ。)

So long. (「さようなら。」くだけた言い方。)

See you later.

See you tomorrow.

I'll be seeing you.

I'll see you next week.

See you at school.

Bye now.

Bye-bye. (「いってきます。」)

Goodbye, Mother!

I'm off (for now).

I'm going now.

I'm going out now. Can I get you anything (at the store)?

Don't wait up for me. I'll be late. (起きて待っていないでいいよ。)

I'll be back before dinner (or 4:30, or you go). (いつてらっしゃい。)

Have a nice day.

I hope everything goes all right today.

I hope the meeting is all right.

Don't study too hard.

Study hard.

Be good.

Be a good boy.

Behave yourself at school. } (「おとなしく、いい子で  
いるんですよ。」子供を  
学校に送り出す時の言  
い方。)

Have a good time.

Have a pleasant trip.

Have a nice vacation.

Bon voyage! ([bɔ̃:vɑʒ] 船や飛行機などで遠くへ旅に出る人を送る時の言い方<フランス語><航海の無事を祈る。>)

Good luck.

Take it easy. (「気楽にやりなさい。」「あまり無理をしないように。」「気をつけて。」「あわてないように。」など、日本語に適切な訳はないが、日常よく使われる言い方。)

Don't forget to write.

Drop me a line.

I hope to hear from you.

(便りをほしい時の言い方。)

I'm back. (「ただいま」非常によく使われるが、家族同士だけの時で、訪問客のいる時には言わない。)

Hello.

Where's everyone?

Anyone at home?

(おかえりなさい。) Did you have a good day?

Was it very hard (at the office) today?

Were you very busy today? } (ただいま。)

How was the meeting?

I must be going now. (おいとまいたします。)

I'm afraid I really must be going.

I must be on my way.

I must be leaving.

I've got to go now.

I'd better be on my way.

It's time to say goodbye.

I'm afraid I have to be going now.

I had a good time. (おじゃましました。)

It was a wonderful party.

It was a delicious dinner.

Thank you very much for everything.

It's been nice talking to you.

I enjoyed talking to you.

Please come again soon. (またいらしてください。)

I hope we can get together again soon.

I hope you'll come again.

Be careful on the way home.

I'm glad you could come. (またいらしてください。)

I enjoyed having you.

I'm glad to have seen you again. (seeはその人に何度もあっている時, meet は初めて会った時に使われる。)

I'm glad to have met you.

Please give my regards to your father.

Say hello to your sister for me. (よろしく。)

My mother sends her regards.

My brother said to say hello.

He sends you his best regards.

<2> After a long absence (しばらく) (しばらく。)

I'm glad to see you again.

It's good to see you again.

Hello, stranger!

(「やあ、しばらく。」)

I haven't seen you for years.

Long time, no see. (「長い間お会いしませんでしたね。」くだけた言いかた。)

(いかがですか。)

How have you been?

How is your family?

How is everything?  
 How is your mother?  
 How is she?  
 I hope you have all been well.  
 (「皆さん、お変わりないでしょうね。」)  
 How are you doing?  
 Do you ever see Mrs. Senner?  
 How was your trip?  
 Did you have a good time?  
 I hope you had a nice trip.  
 What are you doing these days?  
 What have you been doing this summer?  
 Where have you been? (こういった private な質問はなるべく避けた方がよいが、言いかたはこれよりらしい。Where do you do? などとは言わない。)  
 Where are you going?  
 I'm glad to have seen you again. (最初の言いかたに似ているが、初めのは再会した時、これはしばらく話して別れる際に使う。)

〈3〉 Response (応答・あいづち)

(Positive)

Yes,  
 Oh, yes.  
 Yes, certainly.  
 Yes, indeed.  
 Yes, I see.  
 Oh, I see.  
 Of course.  
 Exactly.  
 Quite.  
 (「きっとそうだよ。」)  
 You bet.  
 Surely.  
 Certainly.  
 Good.  
 (「素敵だ。」くだけた言いかた。)  
 Swell.  
 Very good.  
 Wonderful.  
 Excellent.  
 Splendid.  
 That's all right. That's correct.  
 (「それだ!」)  
 That's it.

Yes, I think so.  
 I'm sure.  
 That's true.  
 With pleasure.  
 By all means. (「必ず、もちろん。」)  
 (「どうぞお進めください。」)  
 Go ahead.  
 I quite agree with you.  
 There's no doubt about it.  
 Yes, you're quite right.  
 Yes, that's what I thought.  
 Yes, That's what I was going to say.  
 I guess you're right.  
 I understand what you mean.  
 I believe so.  
 So I am. (「私もそうです。」「I'm interested in it.”  
 —“So am I.” “I like it.”—“So do I.” 相手が be 動詞を使った時は so am I, それ以外の動詞の場合は so do I, で応答します。)

(Negative)

No.  
 Oh, no.  
 Never!  
 I'm possible.  
 Of course not.  
 Perhaps not.  
 Certainly not.  
 Not quite.  
 Terrible!  
 Awful!  
 No, I don't agree with you.  
 Neither am I. (「私もそうではありません。」相手が否定的なことを言った時、自分も同じく否定する場合。  
 “I'm not a student.”—“Neither am I.” “I don't like it.”—“Neither do I.”)  
 Neither do I.  
 It can't be.  
 Nonsense?  
 That's where I cannot agree with you.  
 I'm afraid you're mistaken there.  
 I think you're mistaken about it.  
 I don't think so.  
 (Doubtful)  
 Perhaps.

Maybe.  
 Possibly.  
 Probably.  
 It could be.  
 I'm not sure.  
 I rather doubt it.  
 I guess so.  
 I imagine so.  
 It seems possible.  
 It seems impossible.  
 I think so.  
 I suppose so.  
 I believe so.  
 I dare say it is. (「たぶんそうでしょう。」)  
 You don't say! (「まさか!」)  
 Don't tell a lie.  
 It's quite possible.  
 It's quite probable.  
 I'm rather inclined to doubt it. (「疑わしく思う。」)  
 I shouldn't be surprised. (「別に驚きもしません。そんなことだろうと思った。」)  
 What nonsense!  
 What an idea!  
 Who can believe it!  
 Really?  
 Is that so?  
 Is that true?  
 I can't believe it at all.  
 It's incredible. (「信じられない。」)  
 You're kiddin'. (kidding) (「まさか! 冗談でしょう。」日本語でもそうであるが、この表現は言いかたによっては相手を非難することになるので注意が必要である。)  
 Oh, come on. (「おいおい!」本当のことを言ってみえよ!)  
 What do you mean?  
 That's what you think. (「それはあなたがそう思っていることでしょう。」Youを強く。)  
 How can I? (「どうして私が?」そんなことは私には無理です。)  
 (Surprise) (おどろいた時の表現, 「おや!」とか「まあ!」といった程度で言葉どおりの意味はない。)  
 Oh!  
 Oh, dear!

Dear me!  
 Oh, my!  
 What?  
 Bless my soul!  
 Good heavens!  
 Well I never!  
 Good Gracious!  
 Gracious Heaven! (女性の使う表現。)  
 My gracious!  
 What a pity!  
 Oh, great!  
 Really!  
 Gosh!  
 Golly!  
 Gee!  
 Well, Well, well!  
 You don't mean it! (「そんなばかな。」)  
 That's very strange!  
 Is that so?  
 Are you really?  
 Are you kidding!  
 Then what?  
 So what?  
 How interesting!  
 That's funny.  
 Isn't that wonderful!  
 Isn't that nice!  
 Isn't that something!  
 Good for you! (「えらい! うまい! それはよかった!」)

## 6. お わ り に

筆者がイギリスの King's School of English の English Teaching Course において一年間の研修を終えたのは今から、約 15 年程前のことである。たしか 1 ドル = 360 円位だったと記憶している。もちろん羽田から BOAC 機による take off だった。今回、アメリカの St. Michael's College の graduate course において Teaching English as a Second Language の Workshop に参加してみてさまざまな感慨を持った。それをまとめてみたのがこの研究論文であり、論文というにはいささか恥ずかしい。幾徳工業大学研究紀要にもう一本発表させていただいた論文の方にはアメリカの最

新の Audio-Visual Teaching のデーターを挙げてみた。今後の英語教育（工学）の一つの参考にしていたければ幸いである。

最後に幾徳工業大学菊川、杉山両教授にはなみなみならぬご指導、ご援助をたまわったことを記して謝意を表したい。

「私説英語教育論」 中村 敬 研究社  
「アメリカ日常会話」 龍口直太郎、関田精一共編者作  
評論社  
「英語教授法」 現代英語教育講座 2 研究社  
「英語教育問題の変遷」 現代の英語教育 1 研究社  
「英語教授法辞典」 三省堂  
「Principles of foreign language teaching」 石橋幸  
太郎・増山節夫編著作 成美堂

### 参 考 文 献

「日本人英語の科学」 竹蓋幸生 研究社